

〈特集〉

大学間協定4 大学合同国際シンポジウム「東アジア文明の伝承と発展」
基調講演記録

ネット時代における文化伝承と挑戦 ——台湾海峡兩岸で起こるサブカルチャー衝突についての再考

兩岸關係平和發展協同創新センター主任

厦門大学台湾研究院教授 劉 国深

(愛知大学大学院中国研究科博士後期課程 林 涛 訳)



東アジアは、儒教文化をメインとする多元文化圏である。中華文化と日本文化は東アジアの二大文化として、1000年以上にわたり交流してきた。現代のような交通手段や電子媒体、発達した紙媒体さえもなかった唐と宋の時代に、またその後の元、明、清の時代に、儒教や漢字などの中華文化は日本に伝わり、日本文化の重要な一部として構成されてきた。そして時代が移り変わり、明治維新に入ってから、新たに発展してきた日本文化が中国の文化に大きな影響を与え、中華文化の発展に無視できない重要な役割を果たしてきた。例えば、清の末期に起こった維新運動や、日本語漢字語彙の現代中国語語彙への影響などが挙げられる。このような長い歴史

の中、東アジア諸国間での文化の伝承は、発展のチャンスでもあり、挑戦でもあった。一つ一つせせらぎのような流れだが、長い年月の積み重ねで、全体から見ると実に見事な融合ぶりを見せてくれたのである。

現在、世界各国はネット時代に突入した。文化の伝播は現代の飛行機、船でも比較にならない、もはや「秒速」の時代に入ったといえる。そしてどれだけ遠くに離れていても、文化の共時性が阻まれることがなくなった。私たちは、ほぼ同時に海外のニュースを目の当たりにし、若者たちは海外のプレイヤーとオンラインゲームの対戦をし、大学教授はオンラインで海外と交流する。もはやインターネットなしでの暮らしが成り立たない時代となってきた。しかし、ネット時代において、国の内部、また東アジア諸国の間における文化の伝承及び発展は、決して「秒速」で膨大な情報量が得られるというメリットだけではない。我々は、インターネットは便利さと快適さを提供すると同時に、人々が物事に対して慎重かつ理性的な思考ができなくなるという問題に直面することになりつつあるのだ。それは時に、両国間の人々に誤解を招いたり、感情が高ぶったりするだけでなく、更に危険な衝突ももたらしているのである。

1 ネット時代の「脱権威化」傾向

人類の知識は非常に限られている。情報が爆発的に増加するネット時代において、尚更である。そのような中、有名な華人でノーベル賞受賞者であるサミュエル・ティン（丁肇中）教授は、「我々人類の肉眼で見える物質は僅か4%で、23%の物質は肉眼では見えないが現代の科学的手法で観測可能である。しかし、残りの73%の暗黒物質は未だに観測できない状況である」と述べている。近年、量子ネットワークについての話題は中国で注目を浴びている。まさか「空間物質伝送」の実現が語られるとは誰も思わなかった。より多くの量子関連の科学技術が一般人に「翻訳」されるにつれ、我々はこの世界に驚愕し、専門知識及び未知の世界に畏敬の念を抱くようになった。さらに教育の普及により、博士学位を持つ人が増加した。しかし一方で、情報が爆発的に増加する時代では、「博士」はますます「博識」ではなく、「専門的」になっていくと思われる。多くの人にとつ

て、自分の専門を超えることには、基本的な是非の評価を下す能力はないのである。自分の専門以外のことは、マスコミなどの情報の「大波」に身をまかせることしかできないのである。

インターネットとマスコミは人々が情報や知識を得るための主な手段であり、欠くことのできない生活の一部、また避けたくても避けられないものになっている。皆さんの周りには、固定電話を引かず、テレビを設置せず、紙媒体を全く見ず、携帯電話ばかり見ている人が多くいるだろう。確かに、携帯電話より簡単に情報を入手する手段はないかもしれない。家にあるデスクトップパソコンはすでに放置状態である。今日の中国では、携帯電話一つで、あらゆるものが手に入ると言えるだろう。携帯電話を経由してネット情報を入手する層は、小学生から90代の年寄りまで幅広くいる。インターネットに依存するばかりである。これは新しい文化現象であり、ネット経由で文化の伝承と創造を図ること自体、世代を超えて時代の流れになることを確信している。

飛躍的に発展してきた文化の伝播だが、各国の人文社会学者が膨大な情報量に直面するストレスももたらした。いくら有名な専門家、学者、教授でも、インターネットに比べると個人の知識量、情報を伝えるスピードに無力さを感じることになる。その結果、学者たちは過去にあった「文化的権威」の地位を失い、文化の「脱中心化」、またそれに伴い、いろいろな領域で「脱権威化」の動きに直面することになる。100年以上前に一度西側の文化衝撃の洗礼を受けた東アジア文化圏だが、これからのネット時代において、如何によそからの挑戦を受け止めるのだろうか。これまで1000年以上続いてきた東アジアの伝統文化は内容が比較的、同質で範囲も限られているので、是非・優劣の評価もさほど難しくないが、ネット時代になると、情報量が膨大化している上に、断片的になっているので、一般庶民にとって、価値観の判断、取捨選択は至難の業になってしまう。そのまま自由放任するか、ルールを作って改めるか、東アジアの国々は厳しい決断を求められることになっている。

2 ネット時代における文化伝承の問題

20世紀以前は、知識の学分的分類が限られており、知識は少数の文化人に握られている状況であった。そのため、知識体系は比較的にとまっていた形で伝承されてきた。儒教文化を主体とする東アジアだが、人々の知見、感情、更に価値観もさほど異なりが見られていない。しかし、20世紀に入ってから、学科の細分化、学科内部の知識量の急増により、人文学者の細分化、専門化が進み、少しでも分野が異なると全く分からなくなるという状況が生じている。ネット時代になると、ネット情報も「短平快」(バレーボールのクイックスパイク)のように、投入したらすぐに収益をあげることを求められる。その結果、「玉石混交」になってしまい、文化の伝授者である教師の役割も小さくなっていく一方である。多くの新聞記事にも書かれたように、今日の大学だが、教授が一生懸命授業しているなか、学生たちはネットサーフィンに夢中になっていることが日常的に起きている。

情報の高速更新によって、ネット時代の文化伝播はファストフード化、軽薄化、娯楽化し、ネット文化は簡易化し具象化している。事実関係、論理的な検証は一切なく、閲覧者のクリックを得るために、ひたすら「大袈裟なタイトル」や、「セクシャルコンテンツ」などの手段で目を引く内容は現在のネット上の至る所に発信されている。さらに、脱規則化、脱標準化や「ナンセンス文化」が流行となっている。商業利益の追求により、製作コストが低いコンテンツは売れ筋商品になり、中身よりパッケージが重視されるなどのことが起きている。中国では、100%シルクで手作業の高級布団メーカーが、偽物の生糸を混ぜて作られた安物の真綿布団の横行によって、廃業に追い込まれるということが相次いでいる。純粋なオリジナルはもう重要ではないのだ。現在の文化の伝承もこの流れで、変わった法則で行われるようになった。奇抜で人々を驚かせる文化産品は、もはやセールスポイントとして追及されている。しっかり調査したうえでの論理的な研究はネット上では、逆に冷遇されることになった。長文の学術論文は他の専攻はもちろん、同じ専攻の学者の間でも真剣に読まれることが少なくなっている。

文化のファストフード化は、知識の単純化、断片化をもたらしている。

人々の知識はますますこのような断片から構築されていく。確かに、戦争或いは敵対環境のなかで、「短平快」的な知識や情報は、素早く用いて効果をあげることには、うってつけであるが、結果としては、「勝てば官軍負ければ賊軍」の状態を招き、我々は高い代価を払うことになるだろう。平和的、協力的な時代においては、過度に簡略された知識は協力体制に向いておらず、時には互いに誤解を与えてしまい、協力を中断させることもあるのである。多元文化、断片化した文化の流れの中、我々はネット時代から伝統的な知識体制、発言体制、政治の社会化、社会のガバナンスなどのいろいろな面においての挑戦に、直面することになる。国家間の経済、社会の融合、また新媒体技術の使用に伴い、表層化、断片化した異文化体制が形成されつつあり、既存の国内（地域内）の文化構造も新たな局面を迎えることになる。

3 ネット時代における海峡兩岸サブカルチャーの衝突

ネット文化の負の影響は現在、海峡を挟んで、両側の社会の中で繰り広げられている。メディア人は、インターネットを介して我々に様々なコンテンツを提供するという、ネット文化の最も重要な仲介者である。そして、ネット文化は台湾海峡兩岸をどの方向に導くのかといった、兩岸の運命を握っていると言っても過言ではない。これまで、ジャーナリストは社会のエリート層だと言われてきた。それでも、「マスコミは台湾社会を乱す根源である」という言い方がある。マスコミ業界への新規参入のハードルを設けない国或いは地域では、ネット社会での混乱は必至である。最近、中国南部の某特別行政区は「動乱」に陥っている。マスコミの社会への責任感の欠如が事態悪化要因の一つである。現地では、学生証のコピー1部と数十円の費用だけで記者証を作ることができるそうだ。このような手続きで誕生した「記者」は今事態の悪化を招いている。現在流行りの言い方で、「インターネット時代では、誰でもSNSで発信することで、一つのメディアとして成り立つ（自媒体）」という言い方がある。このような現状は、これまでマスコミ業の神聖性のイメージを覆したと言っても過言ではない。僅か数十円で専門性が高い資格を簡単に手に入れることができ、専門

的な情報を作り出せる現実が到底信じられない。

すでに、マスコミが「無冠の帝王」(権力はないが影響力は大きい)となった台湾では、大衆が信憑性のある情報を得ることは難しくなっている。2000年の台湾地区指導者選挙において、我々も台湾社会にもっともらしい嘘が溢れていることに気づいた。「寺があれば拝む」のように、日和見で発する言葉を選ぶ政治家や、虚偽的な情報が次々に現れてきた。そして私はある講演で、次のように述べた。「台湾のニュースの真実は政治の真実だとは限らず、台湾の政治の真実は社会の真実だとは限らない。台湾の社会の真実は人心の真実だとは限らず、台湾の今日の人心の真実は明日の人心の真実だとは限らない…」2020年に入ってから、このような状況は良くなったか? いいえ。ネット時代に突入して以来、虚偽の情報は増える一方である。私は、兩岸のマスコミの方々が、うその報道を誰も出す気はないと思っているが、きれいごとだけでは見る側、聞く側には伝わらない。私たちは自分が見て、聞いた政治社会をそのまま「コピー」した報道を見る側に渡すこと以外、現象の背後にある本質的なことを、きちんと知ってもらうことが可能だろうか。

更に台湾で近年盛んに行われている「民意調査」を例に挙げてみる。複雑な問題が単純化処理されてしまえば、正確である統計処理は単に間違った情報を拡散するものになってしまう。数量化統計は人々の政治行為の傾向を研究することにおいて、本来、社会科学化への一つの努力であり、絶対に濫用したり、間違った方向へ導いたりしてはいけない。業界内の人なら誰もが知っているはずだが、民意調査というのは非常に限界があるもので、聞くタイミングや聞く相手、そして誰がどのように聞くのか、といった様々な要因で、それぞれ結果が違ってくる。兩岸関係について、多くの複雑な政治問題はこのように、いわゆる「民意調査」とネット文化によって極端に簡易化されてしまった。台湾問題や兩岸関係問題の多くはいろいろな方向性があり、表象の下にある本質的なものは気付かれにくいのである。マスコミ業界の従事者は問題に対して専門的な理解がなければ、その報道はコンピューターによって簡易化、極端化された結論を拡大解釈するだけになってしまう。このようなネット文化は兩岸の溝を埋めることができず、却って火に油を注ぐような逆効果を招き、更には民度の向上には役

に立たないうえ、害を及ぼすものになる。また冷静かつ理性のある専門的な意見は、しばしば受け入れられず、反対に極論は支持されやすいのである。

ここ10年の兩岸関係の道のりを振り返ってみれば、ネット文化は兩岸関係において鍵になる事例が数多くあった。長年積み重ねてきた平和発展の成果はたった一回のネット事件の衝撃に耐えられないこともたくさんあった。例えば、2013年12月の「張懸事件」、2016年1月の「ツウィ謝罪事件」、2017年の「劉楽妍騒動」、2018年の「92（コンセンサス）パン騒動」、2019年の「欧陽娜娜事件」、「台湾水果茶騒動」などである。毎回、ネットニュースは考えある人々に「火中の栗」を拾わせ、兩岸の人々の感情を対立させた、その結果、兩岸の人々は代価を払うことになった。2014年台湾の「ひまわり運動」、2016年1月の台湾地区指導者選挙と民意代表選挙、現在緊張状態にある兩岸関係、どれも激しいネット事件と密接に関連している。ネット時代の潮流は我々として抵抗できないものなので、兩岸関係に携わる研究者はこの時代に順応するしか選択肢がないのである。筆者にとって、もう一つ懸念がある。台湾海峡兩岸に起こっているネット文化による負の影響は、今後は東アジアの他の国にも現れ、東アジアの国々の間の文化伝播にどのような影響を与えるかについてである。

4 ネット時代における文化伝承の活路

他の文化と比べると、ネット時代の政治文化の伝承はより厳しい挑戦に直面している。政治文化の伝播ルートが多様であり、政治社会の構造は今後断片化に向かうことが予想される。政治の権威も崩壊するかもしれない。東アジアの国々は常に社会の秩序崩壊を念頭に置かなければならない。強力な政権によるガバナンスがなければ、政治と社会は無秩序な状況に陥る。中国大陆と台湾のこれまでの発展の道を比較すればお分かりだと思うが、継続される40年の安定と団結は中国大陆の人々が安心して暮らせる秘訣であり、ひたすらねじれた民主と自由を追求することは現在台湾の凋落の根源である。現在、中国南部の某特別行政区で起きている問題は、まさに多元文化が行き過ぎた結果である、あらゆる権威は難しい局面を強

いられている。部分的個人的な要求が過度に強調されると、社会全体にまとまった国家意識が欠如することになる。このような社会には希望があるはずがない。

儒教の倫理と家族社会の関係を重視する東アジアの文化には、集団意識と社会責任は欠かせない。それがないと、社会秩序の崩壊は必至である。社会への責任があるマスコミは単に見る側を満足させるだけでなく、教育の責任もあり、民衆を導いて社会の公共利益を追求しなければならない。現在に至るまでの30年以上、台湾は自称民主、自由の旗の下で、ますます「断片化」していく、もう台湾には偉業達成は困難なのである。以前、台湾社会ではこのような言い方が流行っていた。「台湾社会の混乱には二つの根源がある。一つは立法委員、もう一つはマスコミである」。長年台湾問題を研究してきた者として、私はこの言い方に強く賛同する。「他山の石以て玉を攻むべし」。まさにとある台湾の大物政治家が廈門大学台湾研究院で演説した通りである。「中国大陆をやっつけるには、千軍万馬要らず、台湾の選挙と新聞の自由をそのまま使わせれば、僅か3か月で終わりだ」。

話は戻るが、ネット時代においての文化伝承にはチャンスもあり、挑戦もある。論理的な分析を重視する研究者と文化伝播者もネット時代においての営業戦略を学んで、自分の研究成果をより分かりやすく、注目されやすい形で発信しなければならない。

グローバル化するネット時代において、東アジアの文化の内容及び表現の仕方について、もう一度現代化することはこれからしっかりと考えるべき問題である。今日の東アジアの文化のなかで、文化価値と表現の仕方がどのように伝承し、発展に値するのか、これからの研究者に残された課題である。

(2020年9月修正)